

伝統的なものづくりを通じた地域創造－和綿で紡ぐひとの環づくり－

研究組織

教育学部・准教授・佐々木和也（代表）

教育学部・教授・清水 裕子

エコ・ハウスたかねざわ・野村 恵子

高根沢町住民生活部環境課・片野 秀光

協力：ケアハウス・フローラ、社会福祉法人陽向「陽だまり保育園」、フリースペース・ひよこの家

事業の背景・目的及び意義

エコ・ハウスたかねざわは高根沢町の環境学習の拠点として設置し、環境学習機能（教材提供・講習会・出張授業等）、リサイクルショップ機能、資源ごみ回収事業等を有している。運営は高根沢町が指定する指定管理者のNPO法人とちぎボランティアネットワークが受託している（平成23年度からはNPO法人「ふるさと未来Sou」に継承される予定）。申請者はこれまでエコ・ハウスを拠点に、高根沢町環境課との協働で、伝統染織を中心とした環境学習プログラムを開発し、定期的な学習会を開催することにより環境意識の啓発を支援してきている。さらに、昨年度は、これまでの活動に福祉的な視点を持たせようと、幅広い世代で伝統的な和綿の栽培を通して地域を活性化しようと2年目の活動として、在宅介護支援センターの農地を利用して和綿を栽培し、施設を利用する高齢者の園芸福祉活動として試験的に運営した。11月に地元の保育園とボランティアとの協働で、「綿わた収穫祭り」を開催し、高齢者のレベルアップ効果を確認することができた。この事業を継続しつつ、和綿文化を継承していくための「ものづくり」を通して、ひとの環づくりを目指す。つまり循環型社会を形成していくには、人（ソフト）の還流が不可欠との町の姿勢と本研究のシーズは一致しているところである。従来家庭内で伝承されていた文化を地域で担う取組みに発展させ、地域創造のあり方を検討する。

¹ 里山文化の会URL：
<http://venice.mine.utsunomiya-u.ac.jp/~sasaki/satowiki/index.php?EcoHouse/>

大学側の資産として、担当教員は人間活動の根源である「衣」領域を主たる専門としており、現在の社会システムでは、ほぼ外部化されてしまった衣生活を問い直し、新たな時代創出のための生活者のあり方を提唱している。最近では、衣生活環境における感性教育について、「ものづくり」の立場から教材研究を行っている〔1〕。これまでも、附属小学校の総合の時間において、藍や綿といった伝統染織素材を用いた環境教育の実践研究〔2, 3〕や、まなびの森保育園ならびに陽だまり保育園との連携で、かかわる力を育む染織活動に関する実践研究〔4, 5, 6〕等を展開している。

行政側の資産として、エコハウスは高根沢町の環境学習の拠点として設置され、環境学習機能（教材提供／講習会／出張授業等）、リサイクルショップ機能、資源ごみ回収事業等を有している。運営は高根沢町が指定する指定管理者のNPO法人とちぎボランティアネットワークが受託している。本研究を実施する事前の取組みとして、2005年度から伝統染織を中心とした環境学習プログラムを共同で開発し、定期的な学習会を開催することにより環境意識の啓発に務めている〔7〕。

このような資産をもつ双方が継続的に共同研究として連携をすることは、地域の環境づくりを牽引するESDを推進してきたことは意義深いことと考える。本研究では、介護福祉施設の所有する農地において、とちぎコットンボール銀行〔8〕の人材を中心に、和綿の栽培収穫作業を施設利用者と協働しながら、本来家庭単位で行われていた伝統的な伝承を、自ら栽培した和綿から糸を紡ぎ、

その糸を高齢者が「産着」に仕立てて、地域の子育て世代に還元することで地域活性化を試みている。そこで、今年度は以下の2点について取り組んだ。

(1) 園芸福祉の視点からみた和綿栽培の意義

和綿栽培に地域ぐるみで関わることにより、要介護者の福祉的意義を深めるとともに、地域での子育て環境づくりの一環として定着させる。

(2) 地域創造モデルの検証

伝統的な和綿文化を「ものづくり」の視点から見つめ直し、子どもの成長を祈願した祈りの衣服「産着」を、(1)で栽培した和綿から作り、町内で生まれる赤子に着てもらおうという地域内伝承モデルを創出する。この輪の中で様々な立場で関わる人を繋ぐ「エコマネー」について検討する。

進展状況

(1) 和綿の栽培体制について

「とちぎコットンボール銀行」は、エコハウスで活動する「里山文化の会」のメンバーにより2008年に発足した。この会が、春先の環境イベント等で和綿のワークショップを開催し、コットンボール銀行の栽培会員として種を配布し、収穫できた綿を地域通貨として回収し、その綿で様々な「もの」を制作して流通させていける自立団体に成長することを目的に、4年目の活動に入る。本研究では、この活動に参加する市民のポータルサイトとしてコットンボール銀行を機能させ、福祉施設での協働活動を展開したいと願っているが、活動が営業日である平日となるため、実際は会員の有志がボランティア活動を行うというのが現状で、昨年度からこの状況は打開できていない。しかし、高根沢町が運営する不登校の子どものフリースクールである、「フリースペース・ひよこの家」が積極的に関わってくださるようになり、当初目指した方向とは別の可能性が見えてきた。安定的に交流していくには、様々な問題をクリアしなければな

らないが、教育の観点から園芸福祉としての和綿栽培を模索していく体制づくりを次年度進めることとなった。来年度、若者フェスタに作品発表する方向で連携する。

(2) これまでの成果発表

29ページに、JANU（国立大学協会情報誌）第20号「智の継承」特集に掲載されたものを添付する。

(3) 産着の製作と地域内伝承

昨年度からの課題であった産着（おくるみ）づくりの体制を構築することができた。里山文化の会の会員にニット講師の経歴をもつ方を中心に、里山文化の会の会員が紡いだ和綿糸100%の産着を試作することで、福祉施設利用者への見本を提供した。下写真はイメージ画像として、町内の乳児に着てもらって許可を得て掲載するものである。町内で栽培された和綿オーガニックコットンであることから、基本は生成の白を地に、襟口、袖口などはツルバミ染をした糸をワンポイントで配した。風合いが非常によく、乳児の肌に優しく、母親の満足度も大きかった。



本研究では、エコ・ハウスたかねざわと共同で運営している「里山文化の会」において、和綿を活用する技術を伝授しながら、それを地域に還元

していく施策と位置づけ、2年前に発足させた「とちぎコットンボール銀行」の活動として行った。本年度は、この体制を基本としつつ、行政と大学が地域の保幼少連携を推進し、地域の高齢者との協働のなかで異世代間交流を活性化し、「ものづくり」を重視した環境教育プログラムとして発展させてきた。本年度は、上記のように産着という「かたち」ができたことが大きい。

本年度は、編物として産着を製作したが、さらに織物への展開のための準備を整えた。卓上織機を導入して、里山文化の会の会員の編織技術の向上を計り、会員が高齢者施設での指導者を務められる体制づくりを目指した。今後は、町内で生まれる赤子に成果物として出来上がる和綿産着を着てもらい、異世代間交流を活性化し、伝統文化や生活文化の履歴を次世代に受け継いでいく仕組みづくりとしての、エコマネーを更に模索していく必要がある。

事業の成果

本研究では、これまでエコ・ハウスの里山文化の会のための教育プログラム「糸から衣生活を見直す」「衣生活から共生をめざす」としたプログラムをベースに、「糸にいのちを吹き込む」という実践を行った。このような生涯学習プログラムを町の環境教育として機能させる中で、学習者が主体的に地域に関わって行く活動として、本研究の実践を行った。今年度は、フリースペース・ひよこの家の積極的な参加により、不登校の自立支援を和綿栽培を通して促す可能性も広げることができた。そして、実際に産着づくりが完成したことから、会員のやりがいも大きくなり、来年度以降の具体的な展開が楽しみになった。

なお、これまでの成果として、JANU（国立大学協会情報誌）に取り上げられた。さらに、宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要に「和綿を用いた衣生活文化の地域内伝承による地域再生」と題して投稿した〔9〕。

参考文献

- 〔1〕 佐々木和也、箕輪祐一、清水裕子：里山におけるものづくりの感性に学ぶ環境教育に関する一考察、感性工学研究論文集、Vol. 5、No. 4、pp.103-107、2005
- 〔2〕 佐々木和也、清水裕子：環境感性の育成をめざしたものづくり環境教育の実践的研究、日本感性工学会第8回大会予稿集CDROM版、2007
- 〔3〕 清水裕子、佐々木和也：里山を利用した「もの」「ひと」をつなぐ感性教育・環境教育、平成17年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤C）研究成果報告書、2007
- 〔4〕 保坂里絵：「ひと・もの・こと」とかかわる力を育てる遊びの実践研究、宇都宮大学大学院教育学研究科修士論文、2007
- 〔5〕 保坂里絵、佐々木和也ほか：藍と綿の栽培から染織活動への展開過程における保育効果の検証、国際幼児教育研究（国際幼児教育学会誌）、Vol.16、pp.75-84、2009
- 〔6〕 Kazuya Sasaki, Yuichi Minowa, Hiroko Shimizu: "Possibility of Environmental Education through Natural Dyeing and Weaving", Proc. of the 2nd International Conference on Kansei Engineering and Affective Systems (KEAS'08), Nagaoka University of Technology (Japan), pp. 93-95、2008
- 〔7〕 「里山文化の会」ホームページ：<http://venice.mine.utsunomiya-u.ac.jp/~sasaki/satowiki/index.php?EcoHouse>
- 〔8〕 とちぎコットンボール銀行ホームページ：<http://venice.mine.utsunomiya-u.ac.jp/~sasaki/satowiki/index.php?Cotton>
- 〔9〕 佐々木和也、清水裕子、野村恵子、片野秀光：和綿を用いた衣生活文化の地域内伝承による地域再生、宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要、Vol.33、pp. 283-288、2010

宇都宮大学

伝統素材「和棉」の再生から 地域活性化を目指して

生 物多様性の急速な損失が、人類の未来に深刻なダメージを与えることは、数々の報告からも明らかです。生物多様性の保全には、先住民の文化や伝統的知識の保存と継承が必要です。

日本では里山里海に代表されるような、共生を前提とした生活価値の再生が、生命循環型社会の構築につ

ながり、持続可能な社会を次世代に保障することになります。

そのためには、産官民が一体となった地域レベルでの取り組みが必要であり、なかでも環境に配慮した開発の実現には市民との対話や普及活動を伴った実践的な教育活動が成功の鍵を握っています。

宇都宮大学が行っている研究は、地域の伝統素材である真岡木綿を環境教育素材として再生し、そこにかかわる異世代間の学び合いを通して、地域活性化を目指す官民学連携のモデル事業です。

伝承が持つ循環思想を 環境教育に生かす

東アジア圏を中心に、藍染は古くから利用されてきましたが、日本で藍染が生活文化として定着したのは、江戸中期以降でした。和棉という貴重な素材の使用が庶民にも許され、普及したことで、日本人の繊細な色彩感覚がジャパンブルーと呼ばれる高い藍染技術を育てたのです。しかし、明治期になると繊維産業の近代化により、機械紡績に不向き

な和棉は輸入品に取って代わられ、昭和初期には姿を消しました。かつては200種以上の在来種が農水省に保存されていましたが、国内生産は必要ないとの判断で廃棄され、現存するものは40種にまで減っているのです。

和棉で作られた綿衣料は、何度も染め直して大切に使われ、更に中古品として再利用され、継ぎ接ぎされ、最終的に裂き織りになり、夜着など寒さから命を守る衣服として極限まで使われてきました。1200年以上続いたこのような伝統を継承していくことは、生物多様性の観点から大きな責務です。

同大学では、こうした和棉の歴史性とそこに秘められた循環思想に着目し、伝統染織の視点から環境教育を構想しています。この取り組みの



綿摘みをする高齢者と地元保育園児



綿繰り体験



産着製作の準備（手紡ぎ糸を総くかせ）から玉にする高齢者

活動拠点である栃木県高根沢町の老人福祉施設の畑では、施設を利用する高齢者と地元の子どもたちが協働で和棉を育てています。収穫した綿でボランティア会員が糸を紡ぎ、高齢者が産着を編み、町内で生まれる赤ちゃんに着てもらおう。この活動には、かつて家庭で行われていた伝承を、地域ぐるみで循環させるプロセスを通して、そこにかかわる各世代の価値を創出していく狙いがあります。

高齢者と子どもが協働することで、核家族化により不足しがちな斜めの関係性を補い、手紡ぎ糸から産着を作ることで生きがいも創出する。こうした地域ぐるみの伝承により、「つながり」の温かさが実感できる町作りをしようと、手間ひまをかけて和棉を育てています。